

# 唐宋兩朝詩比較論の成立と

## 『滄浪詩話』

和田 英 信

はじめに

宋代詩話の多くが、詩文および作者をめぐる逸話や、詩句に対する断片的批評、用典などに関する瑣末的な考証の寄せ集めの観を呈するのと一線を画し、南宋末の人、嚴羽の著作『滄浪詩話』は、著者独自の詩観を根底においた総合的な詩論の書として、振幅の大きい毀譽褒貶の評を披りつつ、そのユニークな価値を認められて現代に至っている。

詩弁、詩体、詩法、詩評、考証の、すべて五篇からなる該書は、無論、詩をめぐる多角的な議論を内容とするものだが、本稿において私がとくに着目したい点は、同書の歴史詩史としての性格、とりわけて唐詩と宋詩の比較の議論についてである。唐詩と宋詩の比較論は、『滄浪詩話』以後、詩論における重大なテーマのひとつとなつてゆき、特に明清期においては、詩のあり方をめぐる議論がしばしば

唐詩と宋詩の比較の形をとって行われた。

本稿は、そうした後世の比較論の内実、および詩論家たちの考える「唐詩」「宋詩」のあり方を考究する前提として、宋代の詩論文論の歴史のなかにおける『滄浪詩話』の意義、とくに該書による唐宋詩比較論成立の意味を考えてみたい。具体的には、宋代の数多い詩をめぐる議論の中から、唐宋の比較に関わる言説を拾い出し、『滄浪詩話』に至る流れ、すなわち唐宋詩比較論の成立の過程を追うことが本稿の課題となる。

これと同時に、『滄浪詩話』は、明代以降、唐代の文学史区分の定説となる唐詩四変説の実質的な嚆矢として知られる。本稿では、この唐詩四変説（嚴羽の場合、嚴密には五変説）成立の意義を、嚴羽に前後する詩史観の流れの中で、或いはこれに先行する『唐書』『文芸伝』などの唐代文学三変説との比較対照を通じて、考察したいと思う。異

なる文学史觀の背景をなす文学觀の変遷、詩をめぐる情況の変化にも説き及びたいと考える。

# 一 唐宋詩比較論の萌芽

北宋期の人々にとって、前代すなわち唐の詩が、尊重すべきもの、模範と為すべきものであったことは、たとえば「詩話」類にしばしば見える次のような表現から窺われる。

（蘇）子美の兄、舜元……其の子美との紫閣寺聯句、韓孟に愧ずる無きなり。（歐陽脩『六一詩話』）

潘閔、字逍遙、詩に唐人の風格有り。……僕以為劉長卿に減らずと。（劉放『中山詩話』）

これらはいずれも、宋人の作品を唐人のそれにひき比べた上での或る判断を述べている。但だ、その判断が語るのは、一つの価値軸上における達成度のみであり内容に及ばない。すなわち唐詩が評価の基準、物差しとして示され、それとの対比のうえに、宋人の作品が評価されているわけである。それ故ここから、文字どおりにスタンダードとしての唐詩一般に対する高い評価を見ることはできるが、唐詩と宋詩の質的な相違に関する具体的な見方を知ることが

できない。この時期むしろ注目されるのは、唐詩一般、宋詩一般をめぐる議論ではなく、次のような詩人の個人的なスタイルに関する言及である。

仁宗朝、数達官有り、詩を以て名を知らる。常に白樂天の体を慕う。故に其の語多く容易に得。（『六一詩話』）

ここに見える「体」ということばは、ある詩人の個人的なスタイル、詩風といった意味あいでは使われているが、個人についてばかりでなく、次のように特定の様式を指しても用いられる。

陳舍人從易、時文方に盛んなるの際に当たり、独り醇儒古学を以て称せらる。其の詩多く白樂天に類す。蓋し楊、劉唱和して、西崑集行なわれし自り、後進の学ぶ者争いて之に効い、風雅一変す。之を西崑体と謂う。（『六一詩話』）

さて、この「体」よりも更に一層、表現の様に徹視的に寄り添うことばとして「詩法」「句法」が用いられる。

黄魯直云う、杜の詩法は審言に出で、句法は庾信に出づ。（陳師道『後山詩話』）

王荊公の五字詩、子美の句法を得たり、其の詩に云う、「地

蟠三楚大、天入五湖低」と。

(唐庚『唐子西文録』)

詩話などに見られるこの「・・体」或いは「句法」ということばをたよりに、詩作表現のあり方と、その時間を逐つての変化を大まかに辿ることは可能であり、そしてそれを素朴な歴代詩史と見ることもできそうだ。たとえば『六一詩話』の場合、右に引いた諸条に見える「体」への言及をはじめ、これにその他の条も含めて読み合わせれば、「唐末から五代にかけての文壇の停滞、宋初の『白樂天体』の流行、『西崑体』の席卷、そして梅堯臣、蘇舜欽の登場による革新」という、著者、歐陽脩による唐から宋にかけての詩の歴史のスケッチを抽出することができる。但だ、ここにおいては、まだ唐と宋を対比する意識は薄いようだが、次の例はどうか。

前人の文章、各おの一種の句法あり。老杜「今君起植春江流、予亦江辺具小舟」、「同心不減骨肉親、每語見許文章伯」、此の如きの類、老杜の句法なり。東坡「秋水今幾竿」の類、自ずから是れ東坡の句法なり。魯直「夏扇日在搖、行樂亦云聊」此れ魯直の句法なり。学ぶ者若し能く遍く前作を考うれば、自然に流輩を度越せん。

(『茗溪漁隱叢話』前集卷八引く呂本中『呂氏童蒙訓』)

この資料では、三人の詩人のスタイルが、「前人」のそれとして列挙されている。この「句法」のなかみは必ずしも分明ではないが、対比される詩人のスタイルの、それぞれの個性に着目されていることは言うまでもない。それと同時に、明白に言表されているわけではないが、挙げられている三人のうち、杜甫は唐を、そして蘇軾と黃庭堅は宋を代表する詩人として意識されているよう。唐詩と宋詩の比較論の萌芽的なものがここに窺われるように思う。

宋詩を詩の歴史の中に位置づけたうえ、歴代詩史における宋詩の特徴を本格的に論じたものに、右の資料の書き手、呂本中とはほぼ同時期、南宋初のひと、張戒の『歲寒堂詩話』がある。今人、錢鍾書氏は、その著『談藝錄』の唐詩と宋詩をめぐる議論に際して、「嚴儀卿(羽)首倡斷代言詩、滄浪詩話即謂『本朝人尚理、唐人尚意興』云云」と述べるが、『滄浪詩話』の諸注釈が指摘するように、歴代の詩を時間軸上に配列したものとしては、張戒の『歲寒堂詩話』が『滄浪詩話』に先んじる。

国朝諸人の詩を一等と為し、唐人の詩を一等と為し、六朝の詩を一等と為し、陶、阮、建安七子、両漢を一等と為し、風騷を一等と為す。学ぶ者須らず次を以て参究し、科に盈ちて而る後に進めば可なり。

ここにおいて宋詩（国朝諸人詩）は、「唐人詩」「六朝詩」「陶、阮、建安七子、両漢」「風騷」と並び、一つの要素として詩の歴史のなかに明確に組み込まれているのを見ることが出来る。ただし、詩史を形成する各々の時代様式は、決して互いに等価値に並列されているわけではない。

国風、離騷は固より論ぜず。漢、魏自り以来、詩は子建に妙に、李、杜に成り、而して蘇、黄に壊る。

蘇、黄の習氣、淨め尽して、始めて以て唐人の詩を論ずべし。唐人の声律の習氣、淨め尽して、始めて以て六朝の詩を論ずべし。鐫刻の習氣、淨め尽して、始めて以て曹、劉、李、杜の詩を論ずべし。

ここに窺われるのは、宋詩↓唐詩↓六朝↓漢魏及び李杜という、李白と杜甫を別格とした、時間を遡る高みへの階梯、ある意味では典型的な「宋古陋今」の文学観と言えよう。そして今一つ注意されるのは、先の「国朝諸人詩」に相当するものとして「蘇黄」の名が具体的に挙げられていることである。

先に挙げた、呂本中による杜甫、蘇軾、黄庭堅の三者をめぐる議論、そこに論者は、唐詩と宋詩の比較の議論の萌芽を認めたわけだが、呂は言うまでもなく、杜甫から黄庭

堅への衣鉢の継承を宗旨とする江西詩派の首唱者であり、また蘇軾の詩の愛好者でもあった。一方、歴代の詩の中に、おそらくは初めて宋詩を位置づけて論じた張戒もまた、その評価は呂とは対照的ながら、宋詩の個性を形作る詩人の代表として蘇軾と黄庭堅の両者を意識していたことが、右の資料から知られる。総じて言えることは、評価の方向性は別として、蘇軾、黄庭堅の達成を契機に、宋詩の歴史的評価が行われるようになったことであろう。

では張戒は、蘇軾、黄庭堅の何を批判しているのだろうか。唐詩の場合は「声律」、六朝詩にあつては「鐫刻」と、それぞれの時代様式における克服すべき課題が挙げられているなか、宋詩における「蘇黄の習氣」とは具体的にどのようなものを指すのか。その蘇黄批判を手がかりに、彼の目に映る宋詩の姿の一端を、今しばらく追ってみよう。

子瞻は議論を以て詩を作り、魯直は又専ら以て奇字を補綴す。学ぶ者、未だ其の長ずる所を得ずして、先に其の短なき所を得、詩人の意、地を掃けり。

この一節は、先に引いた「詩は子建に妙に、李杜に成り、蘇黄に壊る」の後に接するものだが、宋詩の一特徴とされる詩の散文化を批判する、早い時期のものと言ってよからう。詩の散文化批判としては、中唐、韓愈の詩についてだ

が、魏泰『臨漢隱居詩話』（並びに『冷齋夜話』）に沈括のことばとして引かれる「韓退之の詩は乃ち押韻の文なるのみ、健美富贍なりと雖も、格は詩に近からず」という一節が想起されるが、後には『滄浪詩話』の有名な一節、「近代の諸公、奇特の解会を作し、文字を以て詩を為り、議論を以て詩を為り、才学を以て詩を為る、是を以て詩を為る、夫れ豈に工みならざらん、終に古人の詩に非ざるなり。」に見えるように、宋詩の大きな特徴の一つとして、批評家たちの論調の中に浸透してゆく。また黄庭堅の「奇字」使用についても、『臨漢隱居詩話』に、「黄庭堅、詩を作り名を得るを喜ぶ。好みて南朝人の語を用い、専ら古人の未だ使わざるの事を求む。また一二の奇字も綴葺して詩を成し、自ら以て工みと為す。其の実見る所の僻なるなり。故に句新奇なりと雖も、氣渾厚に乏し。」と非難されている。次の一節では、蘇軾、黄庭堅両者の、先行する文学から彼らへの継承関係について。

黄魯直、自ら杜子美に学ぶと言ひ、子瞻自ら陶淵明に学ぶと言ふ。二人の好惡、已に同じからず。魯直、子美に学ぶも、但だ其の格律を得るのみ。子瞻は則ち又専ら淵明を称げ、且つ曰く、曹、劉、鮑、謝、李、杜の諸子、皆及ばざるなりと。夫れ鮑、謝の及ばざるは則ちこれ有るも、子建、李、杜の詩の若きは、亦た何ぞ淵明に愧じん。即ち淵明の

詩、妙は味有るに在るのみ。

蘇黄が学んだとされる陶淵明と杜甫、この両者に共通することは、それ以前に比べて、宋代に至って急速に評価が高まり、定着した詩人であること。蘇軾の陶淵明に対する傾倒はよく知られるところだが、この張戒の言の基づくところ、『苕溪漁隱叢話』前集卷四に東坡の言を引き「吾、詩人に於いて甚だしく好む所無きも、独り淵明の詩を好む。淵明、詩を作ること多からず。然れども其の詩、質にして実は綺、癭にして実は腴なり。曹、劉、鮑、謝、李、杜、諸人自り、皆及ぶ莫きなり。」とあるのがそれに当たろう。ここでは淵明を「曹、劉、李、杜」の上に置く東坡の見識が、糾されている。

一方、黄庭堅が杜甫に学んだとする点、これについて張戒は、黄庭堅が学んだのは杜甫の「格律」のみであるとす。「格律」とは、ここでは近体ならびに対偶等の一定の規則を有する詩形、及びその詩法を指して云うもののようにだ。張戒はまた、「江西詩社宗派図」の作者として詩壇の黄庭堅崇拜のきっかけを作った呂本中とのやりとりの中でも、

往に桐廬に在りて呂舍人居仁に見ゆ。余問う、魯直、子美の髓を得たるか。居仁曰く、然り、……（張曰く）子美「不見受公三十年、封書寄与淚潺湲……」の如き、此等

の句、魯直少日に能くす。「方丈涉海費時節、玄圃尋河知有無」此等の句、魯直晩年に能くす。：「莫自使眼枯、收汝淚縱橫、眼枯却見骨、天地終無情」の如き、此等の句、魯直、能く到れるや。居仁沈吟之を久しくして曰く、子美の詩、学ぶ可き者有り、学ぶ可からざる者有り。余曰く、然れば則ち、未だ之を髓を得たりと謂う可からずと。

黄庭堅は、杜甫本来の「髓」とも言うべき本格的な五言古詩については及び得なかつたことを、七律（右の「因許八奉寄江寧旻上人」、七言歌行（右、「嶽麓山道林二寺行」）などに、「新安吏」等の古詩を對比させて主張している。

さらに次の資料では、蘇黄の表現、とくにその修辭技術に対する批判が見られる。

詩の用事を以て博と為すは、顔光祿に始まり、杜子美に極まる。押韻を以て工みなるは、韓退之に始まり、蘇、黄に極まる。然れども、詩は、志の之く所なり、情中に動き言に形わる。豈に意を詠物に専らにせんや。……蘇、黄の用事押韻の工みなる、至れり尽くせり。然れども其の實を究むれば、乃ち詩人中の一害、後生をして只だ用事押韻の詩為るを知るも、詠物の工為ると、言志の本為るを知らざらむるなり。風雅此れ自り地を掃けり。

ここでは蘇黄における「用事」すなわち典故運用、なら

びに「押韻」の巧みさ（たとえば陰韻を取えて選り用いること、或いは次韻の多用といったことを指すであろう）という、ふたつの面の達成が、むしろ詩の本来のあり方を損なう欠点として取り上げられている。その蘇黄批判からも窺われる張戒の詩学の一特徴は、形式や技術よりも内容を重視する点で、これは次の一節に明白にうたわれている。

建安、陶阮以前の詩、専ら言志を以てし、潘陸以後の詩、専ら詠物を以てす。兼て之れ有る者は、李杜なり。言志は乃ち詩人の本意なり。詠物は特だ詩人の余事なるのみ。古詩、蘇、李、曹、劉、陶、阮は、本と詠物に期せざるも、詠物の工、卓然として天成し、復た及ぶ可からず。其の情の真、其の味の長、其の氣の勝、三百篇に視ぶるも愧ずる無きに幾し。凡そ詩人の本意を得たるを以てなり。潘陸以後、専ら詠物を意とし、彫鐫刻鏤の工、日び以て増えたるも、詩人の本旨、地を掃きて尽きたり。

彼は詩作の當為を大きく「言志」と「詠物」に分ける。

この二つを対比的にとらえるならば、「言志」とは、内なるもの（志）の表出（言）、「詠物」とは、外なるもの（物）の描写（詠）となるうか。「言志」は無論、『尚書』（舜典）、『詩』（大序）以来、詩の本旨とされてきたところ、張戒は「詩人の本意」としてのこの「言志」に、「余事」とし

ての「詠物」を従属させる。彼によれば、「詠物」は一面的に貶められるものではないが、「言志」に意を注げば自ずと成るものであり、目的とするところではない。そして詩の歴史は「言志」が重視された時代から「詠物」中心の時代へとという下降の歴史に他ならず、まして蘇黄にあっては、「用事押韻の詩爲るを知るも、詠物の工爲ると言志の本爲るを知らざる」ものとして、更に一等下る評価を下される。

但だ、張戒の発言を見る際、忘れてならない点は、それが、南渡後の元祐文学の解禁に江西派の盛行が相まつて、蘇軾と黄庭堅の評価が絶大であつた詩壇に向けられていること、すなわち当代文学に対する批判がその意識の根底にあることだ。それ故、『歳寒堂詩話』の他の条を含めて通覧するならば、蘇軾、黄庭堅の文学を全面的に否定するというわけではなく、彼ら自身の成就については一定に評価しており、彼の批判の眼はむしろ、蘇黄の詩のあり方を無反省に受け入れ、その「習氣」に染まる「後生」「学ぶ者」たちのあり方に向けられているように見受けられる。

以上、蘇軾、黄庭堅の詩の問題点として張戒が指摘するところを見て気づくのは、その何れもが、張戒に前後して他の論者からも指摘され、やがて蘇黄の文学の特徴として、特にマイナス面を論ずる際に、なかば定説化して取り上げ

られる点であること、そして、それらの多くがやがて「宋詩」一般の特質として指摘されるところと重なってゆくことだ。このことは、蘇軾、黄庭堅の出現が詩史的に見てひとつの画期であつたこと、そしてそれが多くの詩論家たちの興味、関心を、「唐詩」と「宋詩」の違い、詩の唐宋比較に向けさせる契機となつたことを示しているだろう。

張戒の見解は特に後に見る『滄浪詩話』の議論に引き継がれているものが多いが、両者の相異も含めて、次に節を改めて論じたいと思う。

## 二 「滄浪詩話」における唐宋比較

唐人と本朝の人との詩、未だ巧拙を論ぜず。直だ是れ氣象  
同じからざるのみ。(詩評)

詩に詞、理、意興有り。南朝の人、詞を尚びて理に病めり。本朝の人、理を尚びて意興に病めり。唐人は意興を尚びて理は其の中に在り。漢魏の詩、詞理意興、跡の求む可き無し。(詩評)

詩話としての嚴羽の著作の大きな特質は、詩に関する様々な議論を網羅する、その体系性にある。中でも、詩の様式の歴史的変遷に関する目配りは、先に見た『歳寒堂詩

話」に先蹤が見られるとはいえ、より本格的にこれを取り扱うのは、『滄浪詩話』を以て嚆矢とする。

また唐詩と宋詩の比較論は、南宋後半に成立した本書を待って、それにふさわしい視野を確保したと言つてよい。事実、唐と宋の比較、並びにそれを含む歴代詩の比較は、右に掲げた二条をはじめ、本書の主要なテーマとして、繰り返し取り上げられている。ここでは、嚴羽の詩史觀を中心に、唐宋比較の問題を考えてみたいと思う。

『滄浪詩話』五篇のうちの「詩体」篇は、歴代の詩を「体」により分類して名付け、時代順に排列したものである。漢魏の「建安体」「黄初体」に始まり、宋の「江西宗派体」に至る、時代名（年号など）を冠した様式の名称（時を以て論じたもの）と、「蘇李」（蘇武、李陵）体より「楊誠齋」（万里）体に至る、ひとり或いは複数の、詩人名による様式の名称（人を以て論じたもの）が、それぞれ列挙されている。同篇には、それぞれの「体」について、その指し示すところが非常に簡単に記されているほか、各体に対する評価は特に記されていない。しかし、詩の様式の歴史的展開に対する嚴羽の特別な関心は、この「詩体」篇を設けたことにも十分に窺われるし、また一方、他の篇に目を移すと、本節冒頭に掲げたものを初め、彼の詩史觀があちこちに披

露されている。今そのうちのいくつかを取り上げて見る。

試みに漢魏の詩を取りて之に熟參し、次に晋宋の詩を取りて之に熟參し、次に南北朝の詩を取りて之に熟參し、次に沈宋、王楊盧駱、陳拾遺の詩を取りて之に熟參し、次に開元天宝の諸家の詩を取りて之に熟參し、次に独り李杜二公の詩を取りて之に熟參し、また大曆の十才子の詩を取りて之に熟參し、また元和の詩を取りて之に熟參し、また尽く晚唐の諸家の詩を取りて之に熟參し、また本朝の蘇黄以下の諸家の詩を取りて之に熟參せば、其の真の是非も自ずから隠す能わざる者あらん。儼し猶お此に於いて見る無くんば、則ち是れ野狐外道に其の真識を蒙弊せられ、救薬す可からず、終に悟らざるなり。（詩弁）

「詩を論ずるは禅を論ずるが如し」と、詩の理解を禅における「妙悟」になぞらえる嚴羽独特の言い回しについては今は置き、学ぶべきものとして挙げられている各時代の詩にのみ注意を向けるなら、「漢魏」の詩以下、「晋宋」「南北朝」「沈宋王楊盧駱陳拾遺」「開元天宝諸家」「李杜」「大曆十才子」「元和」「晚唐諸家」「本朝蘇黄以下諸家」と、各代の詩のスタイルが、古代から当代へと時代を下るように排列されている。これは、「詩体」篇に見えるすべて十六の時代による様式区分と、同じく三十六の詩人名による



様式区分とを折衷し、その要を挙げたものと言える。試みにこれを張戒の区分に比べてみるならば、おおよその流れは兩者共通するものの、嚴羽の分類が唐代の詩に關して特に細かいことが指摘できよう。

張戒の場合、「唐詩」一般と「李杜」を区別していたことは先に見たとおりだが、嚴羽はここでは、六つに分け、それを時代順に並べる。そのうち「開元天宝諸家」と「李杜」を合わせれば「盛唐」になり都合五つ。實際「詩体」篇では、「唐初体」、「盛唐体」、「大曆体」、「元和体」、「晚唐体」の五つに分けられている。このうち「大曆体」と「元和体」を併せれば四つとなり、唐詩四變説の濫觴とされるゆえんであるが、このことについては後述する。

さて嚴羽は、右の分類に先立って、各代の詩に対する彼の評価を、これも禪になぞらえて述べている。

禪家者流、乘に小大有り、宗に南北有り、道に邪正有り。学ぶ者須く最上乘よりし、正法眼を具え、第一義を悟るべし。小乘禪、声聞辟支果の若きは、皆な正に非ざるなり。詩を論ずるは禪を論ずるが如し。漢魏晉と盛唐との詩は、則ち第一義なり。大曆以還の詩は、則ち小乘禪なり。已に第二義に落つ。晚唐の詩は、則ち声聞辟支果なり。漢魏晉と盛唐との詩を学ぶ者は、臨濟下なり。大曆以還の詩を学ぶ者は、曹洞下なり。

(詩弁)

ここでは、「漢魏晉」「盛唐」「大曆以還」「晚唐」と、更に大まかな表現が採られているが、各代の詩に対する評価が明白にされている。先の張戒は、盛唐ということばを用いてないが、今かりにこれを李白杜甫に置き換えるならば、其の評価は漢魏詩に対する評価とともに兩者共通する。ただ、張戒と嚴羽の異なる点は、嚴羽が「大曆」以降とそれ以前を嚴密に分け隔てることだ。

張戒が李白杜甫に対して、唐詩の中にあつて別格の評価を与えていたことは、先に見たとおりだが、「大曆」の前と後で、唐詩の性格あるいは質の変化を特に認めてはいない。たとえば、次のように「大曆」以後に属する韓愈の詩についても、李杜に準ずる高い評価を下している。

杜子美、李太白、韓退之 三人、才力俱に及ぶべからず。

退之の詩、正に太白と敵と為すべし。然れども二豪並び立たず。当に退之を第三に屈すべし。

これに対し嚴羽は「大曆以還」の峻別を強く主張する。

大曆以前、分明に別に是れ一副の言語なり。晚唐は分明に別に是れ一副の言語なり。本朝の諸公、分明に別に是れ一副の言語なり。此くの如く見て、方めて一隻眼を具うと許す。

(詩評)

「盛唐」を唐詩の最高潮とし、「大曆」以降を下降の時代、或いは過渡期とする詩史観は、張戒には明確には見られないものの、実のところ後に見るように、必ずしも嚴羽独自のものではなく、むしろ嚴羽と詩の見方を大きく異にする詩論家たちにも、意見の一致を見るものがある。

ただ嚴羽が他の批評家にもまして声高に、唐詩における「大曆」以降の断絶を主張していることは事実であり、それが嚴羽の詩観ならびに詩史観の最大の特徴なのだが、その背景には、唐詩そのものに対する見方に加え、宋詩に対する彼の評価が関係している。次に嚴羽による宋代の詩の歴史の概観を見ておきたい。

国初の詩、尚お唐人に沿襲す。王黃州は白楽天を学び、楊文公、劉中山は李商隱を学び、盛文肅は韋蘇州を学び、歐陽公は韓退之の古詩を学び、梅聖俞は唐人の平澹なる處を學べり。東坡、山谷に至りて、始めて自ら己が意を出だして以て詩を為り、唐人の風變ぜり。山谷の用工尤も深刻と爲す。其の後、法席盛んに行なわれ、海内稱して江西宗派と爲す。近世、趙紫之、翁靈舒が輩、独り賈島、姚合の詩を喜び、稍や復た清苦の風に就く。江湖の詩人、多く其の体に効い、一時自ら之を唐宗と謂う。知らず止だ声聞辟支の果に入るを。豈に盛唐諸公の大乘法眼なる者ならんや。

ああ、正法眼の伝わる無きこと久し。唐詩の説未だ唱えられざるも、唐詩の道 或いは時有りて明らかなり。今既に其の体を唱えて唐詩と曰う。則ち學者謂えらく唐詩は誠に是に止まるのみと。詩道の不幸を重ぬるに非ざるを得んや。故に予自ら量度せず、輒ち詩の宗旨を定め、且つ禪を借りて以て喩えと爲し、漢魏以来を推原して、截然として当に盛唐を以て法と爲すべしと謂う。（後 漢魏を捨てて独り盛唐と言ふは、古と律の体備われるを謂うなり）罪を世の君子に獲と雖も、辞せざるなり。（詩弁）

唐の詩を時代を逐って細かに分類、分期した嚴羽は、宋の詩についても、「国初」「東坡、山谷」「江西宗派」「趙翁」並びに「江湖詩人」と、詩風の変遷をたどる。ここに氣づくのは、宋詩の変遷を、常に唐詩との照応のもとにたどっていることだ。宋詩の歴史は、詩のあるべき姿、すなわち唐詩からの逸脱の過程として捉えられる。

ここで主に批判されている対象はみつつ。一つは宋詩を唐詩からかけ隔たったところに導いてしまった、蘇軾と黃庭堅。二つめは、その黃庭堅の詩學を護持する江西派。三つめは、賈島、姚合の詩風に倣い、それを「唐詩」と称する趙紫之（師秀）、翁靈舒（卷）、すなわち「永嘉四靈」、及びそれに倣う江湖派である。これらのうち前二者に対する見解は、ほとんど張戒のそれを踏襲している。

近代の諸公、奇特の解会を作し、文字を以て詩を為り、議論を以て詩を為り、才学を以て詩を為る、是を以て詩を為る、夫れ豈に工ならざらん、終に古人の詩に非ざるなり。蓋し一唱三嘆の音に於いて、歎らざる所あり。且つ其の作は多く使事に努め、興致を問わず。用字は必ず來歴あり、押韻は必ず出處あり、之を讀みて篇を終るも、着到の何くに在るやを知らず。

(一部再掲、詩弁)

蘇軾が「議論を以て詩を作」ったとする張戒の批判が、嚴羽のこの一節に受け継がれていることは前節に見たが、またここに嚴羽が指摘する、「近代諸公」における押韻、用字、用事などの偏重、多用、およびその詩作における弊害についてまた、張戒の蘇黃批判にすでに見えたところである。そして江西派の隆盛を、右の弊害の詩壇における蔓延として捉えて批判する点も同様であった。

南宋初の張戒に、三つめの「四靈」「江湖詩人」に関する言及が見えないのは当然のことではあるが、嚴羽の唐詩觀を見るにあたつては、このいわゆる「江湖派」の詩の流行は大きな意味を持つ。

十三世紀の初め、「永嘉四靈」すなわち、趙師秀、翁卷、徐照、徐玟らが、「晚唐」の賈島、姚合の詩に学び、やがてその風が民間の詩人たち「江湖詩人」らにも引き継がれた。その「四靈」のうち徐玟の墓誌銘は、彼らの師、葉適が筆

を執つたものだが、そこに言う、「唐詩靡されて久し、君其の友、徐照、翁卷、趙師秀と議して曰く、昔人浮声切響、单字隻句を以て巧拙を計る。蓋し風騷の至精なり。近世は乃ち篇を連ね牘を累ね、汗漫にして禁ずる無し。豈に能く名家たらんや。四人の語、遂に其の工を極め、而して唐詩此れ由り復た行わる。」と。また同じく徐照の墓誌銘においても、四人が唐詩の再興を心がけたことが記される(『水心先生文集』卷二十一、同卷十七)。「截然として盛唐を以て法と為す」嚴羽にとって、こうした「唐詩」の捉え方が受け入れがたいものであったことは、言うまでもない。ここに唐詩の分期が要請されたと言つてよいだろう。

ここで改めて、張戒と嚴羽の詩觀および詩史觀の異同を確認しておこう。まず共通するのは、李白、杜甫並びに漢魏詩を高く評価すること。また当代詩、すなわち宋詩に関しては、その論調も含めて、嚴羽は張戒の影響を大きく受けている。両者は宋詩批判の書としての性格を共有している。一方、唐詩についての認識はどうだろうか。

張戒が杜甫、李白と、他の唐人との間に一線を引く、つまりは価値の軽重を伴いつつも並行する二つのスタイル(彼のことばに倣えば、各々「一等」として唐詩を捉えるのに対し、嚴羽は「大曆」以前と「大曆」以還というふ

うに、時間の流れの前後に価値の高低を振り分け、更にそれに基つき都合五つの時代様式をたてる。李杜を別格とするその趣旨のみを捉えれば、両者にそれほど隔たりはないとも言えようが、詩の様式を歴史に沿って排列する形式、歴代詩史としての体裁は、嚴羽の方がより合理化され、整理されたと言つてよい。嚴羽の場合、張戒以後の宋詩の展開を踏まえ、宋詩と唐詩を対比する意識がより尖鋭になり、それが唐詩の純化（或いは理想化）を要求し、その結果、濾過されたものとしての「盛唐詩」の概念と、それを中心とした唐詩の時代区分が生み出されたと言つてよからう。

また張戒は、宋詩における「蘇黃」、六朝詩における「鎬刻」と並べて、唐詩にあつてはその「声律」を、「浄め尽くす」べき「習気」として挙げるのは先に見た。「声律」とはすなわち、とくに近体に求められる韻律上の修飾を指すものであらう。「言志」を詩の本旨とし、詩の内容を重視する張戒が、外面的な「声律」の拘束を否定するのは頷かれるところであるが、一方、嚴羽は近体詩を、むしろ重視する。「後漢魏を捨てて独り盛唐と言ふは、古と律の体備われるを謂うなり（再掲「詩弁」）。ここでは古体、近体合わせての古典詩の形式の完成を言つもののようであるが、また次のようにも述べる

律詩は古詩よりも難く、絶句は八句よりも難く、七言律詩は五言律詩よりも難く、五言絶句は七言絶句よりも難し。

（詩法）

「言志」を尊重する張戒の詩観が、ある意味で伝統的な儒家の立場に拠るものであることは言うまでもない。先に引いた、黃庭堅をめぐる呂本中とのやりとりの中でも、杜甫の古詩（新安吏）を挙げて、黃庭堅と杜甫の格差を主張していたように、彼は古体を、より重視する。一方これに対し嚴羽の立場が反儒家的であるなどと言つわけではない。しかし荒井氏が指摘されるように、たとえば載道派の詩観からは遠いところに嚴羽の意識があることも事実である。

その彼の詩学の根本にあるのが、「興趣」の概念である。彼は詩を詩たらしめる最も重要なものとして、この「興趣」を説く。

盛唐の諸人、惟だ興趣に在り。羚羊角を掛く、跡の求むべきなし。故に其の妙処、透徹玲瓏、湊泊すべからず。

（詩弁）

古体、近体という詩の形式と「興趣」との関連は、直接に言及されているわけではなく判然とはしないのだが、少なくとも、詩の形式以前に「興趣」があること、そして嚴羽が近体を重視している事実是否めない。このことにつ

ては後に再び触れる。

張戒と嚴羽、この両者の根本的な詩観の相違は置き、歴代詩史、或いは詩の唐宋比較論として見比べた際、やはり大きな違いは、嚴羽による唐詩の時代区分、並びに「大曆以還」の断絶の主張であろう。繰り返すことになるが、嚴羽の詩史観の中心にあるのは、李杜をはじめとする盛唐詩を絶対的なものとする考えであり、これに加え、「江西派」や「江湖派」の流行という、当代文学に対する批判意識が、「大曆以還」の断絶、ひいては唐詩の分期を彼に主張させる。すなわち嚴羽における唐宋詩の比較論と、彼による唐詩の時代区分は、表裏を成して切り放せないものなのだ。

そこで、歴代詩史、あるいは唐宋詩比較論としての『滄浪詩話』の性格を、より明確に文学批評史の中に捉えるために、次にこの唐代の文学史区分の問題を、今少し掘り下げて見ておきたいと思う。

### 三 唐代の文学史区分

そもそも「盛唐」の概念はいつ頃成立したのであるうか。「詩体」篇において嚴羽は、「盛唐」を「景雲以後、開元天寶諸公之詩」とする。このように時代区分の意味を有する「盛唐」のことは、やはり嚴羽以前には遑れないよう

である。しかし、この「盛唐」が指し示すうち、李白杜甫の達成を詩の歴史の中で最高のものとする考えは、張戒もそうであったように宋代にあってはむしろ常識であり、早くは、韓愈、白居易、元稹といった、中唐の代表的文学者たちにもその考えがうかがわれる。

また一方、「盛唐」より後の詩の展開についてはどうであろうか。中唐の皎然『詩式』（五卷本）巻四には、「大曆中の詞人は竊かに青山白雲、春風芳草を占めて、以て己が有と為せり。吾知る、詩道の初めて喪ぶは、正にここに在らんことを」と、夙に嚴羽と同様、「大曆」以降の詩のあり方の変化が言われている。

文学史における「大曆」といえば、想起されるもののひとつに「大曆十才子」がある。『滄浪詩話』にも先に挙げた「詩弁」のほか「詩体」においても、歴代のスタイルのひとつとして見えていた。このことは、一面では無論、才ある詩人の多さを強調したものであろうが、詩の歴史を語る文脈に置いてこれを見たとき、必ずしも高い評価に結びつくとは限らない。むしろ十人を集めて一つのスタイルと認識されていること、これはすなわち、「十」を構成する一人ひとりの個性や重みが相対的に小さいとも受け取れよう。唐宋の司空図『与王駕評詩』（『司空表聖文集』巻一）に、「国初、上文章を好み、風雅特に盛んなり。沈宋始

めて之を興し、後に江寧に傑出す。宏思は李杜に於いて極まる。右丞、蘇州、趣味は澄瑗、清沈の貫達するが若し。

大曆の十数公、抑そも又た其れ次げり。」と。この「大曆十数公」とあるのは、恐らくは「十才子」と同じ、もしくは重なる詩人たちを指すと思われるが、具体的詩人名に触れない。また「大曆十才子」のことばと詩人名が初めて見えるのは『唐書』『文芸伝』下、盧綸の條だが、周知のよう「十才子」の中身は、資料により揺れがある。「十」と数字は具体的でありながら、その指し示す具体的な詩人名が資料により一定しないことにも、その評価が自ずと現れているように思われる。嚴羽が「大曆体、大曆十才子之詩」と挙げるのも、個人ごとのスタイルとしてではなく、時代によって区分された「体」の一つとしてであった。

また「大曆」年間は、とりもなおさず杜甫の没年に当たる。杜甫の没年を『旧唐書』本伝が永泰二年とするのに対し、諸家がその誤りに注意する（蘇舜欽「題杜子美別集後」等）が、杜甫評価が確立し、その事跡の考証も進んだ宋以降、恐らくは「大曆」は詩を語る人々にとって、「杜甫以後」の意味も兼ねて担っていたように思われる。

要するに「大曆」は、それ以前の諸詩人の活躍のあと、特に杜甫以降、詩の歴史に変化がもたらされた時期として、嚴羽以外の批評家達からも受けとめられていたこと

になる。

宋詩の評価に関しては嚴羽とおよそ対照的な呂本中もまた「唐李杜の出でて、一世に焜耀たりし自り、後の詩を言う者、皆能く及ぶ莫きなり。韓、柳、孟郊、張籍諸人に至り、激昂奮勵するも、終に前の作者と並ぶ能わず。元和以後、国朝に至るまで、歌詩の作の或いは伝わる者も、多く旧文に依効し、未だ趣く所を尽くさず、……」『苕溪漁隱叢話』前集卷四十八引く「宗派図序」と、「大曆」「元和」にことばの出入りがあるが、李杜以降の断絶を、同じく主張する。

さてこの「大曆」「元和」を併せて「中唐」としたのが、一般には明、高棅の『唐詩品彙』で、これ以降、唐詩四変説が浸透してゆくとされるのだが、「中唐」ということは自体は、これに先んじて元初、方回によって編まれた唐宋律詩の選集、『瀛奎律髓』巻十、許渾「春日題韋曲野老邨舍」詩の方回の評に「予の詩を選ぶは老杜を以て主と為す。老杜同時の人、皆な盛唐の作、亦た皆な之を取る。中唐は則ち大曆以後、元和以前、亦た多く之を取る。晚唐諸人、賈島、一別派を開き、姚合、之を継ぐ……」と見える。

方回は周知のとおり、江西派の詩観を奉ずる詩論家で、特に蘇軾、黃庭堅、陳師道ら宋人の詩を、唐詩に劣らず高く評価する点においては、嚴羽の詩観と相容れないが、唐

詩の時代区分については、「盛唐」の後を「中唐」とし、其の後に「晚唐」を配するなど、嚴羽の区分を襲っている。

嚴羽の「大曆」「元和」を併せて「中唐」とする他に、嚴羽の区分に見えて方回に見えないのは「唐初体」で、こうした用語の不統一は、それが用いられるようになって間がないこと、或いは方回の右の区分が直接に嚴羽に倣ったものではないことを示すかもしれない。ただ実質的内容は嚴羽と異ならない。嚴羽から方回の時間的な距離は、おおよそ五十年ほどだが、おそらく唐詩の時代区分は嚴羽の提唱以来、ことばの若干の揺れを伴いつつ浸透していったものと思われる。このことは批評家の多少の詩観の違いを越える合理性を四変説が有していることを示していよう。やがて明代、古文辞派の隆盛と盛唐詩の絶対的重視を承け、四変説が唐代の文学史区分として定着してゆくことは周知のとおりである。

しかしながら振り返って嚴羽以前に遡ると、彼の云う「盛唐」を、必ずしも唐代文学の頂点とは見なさない文学史も存在した。いわゆる唐代文学三変説である。嚴羽の「盛唐」説と三変説、この両者はどのように異なるのか、またいかなる背景のもとに生み出されてきたのであろうか。

世に謂う、貞元元和の間、辞人の咳唾、皆な珠玉を成せり。

(姚鉉「唐文粹」序)

これまで見てきたところでは、「大曆」「元和」とは、盛りを過ぎた下降期或いは過渡期としての受けとめ方がもっぱらであったが、三変説にあっては、これとは正に反対に、この元和を含む中唐を唐代文学の最高の時代とする。小川環樹氏「唐詩概説」は、右に挙げた「唐文粹」を、三変説の初めとするが、そこには明確に「三変」がうたわれているわけではない。ただ、貞元、元和期を唐代文学の最高の時期とする点では、実質的にその先駆と云える。「三変」をはっきりと言うのは宗祁「唐書」「文芸伝」である。

唐 天下を有つこと三百年、文章 無慮 三変す。...

・・・大曆、貞元の間、美才輩出し、道真を播磨し、聖涯を涵泳す。是に於いて、韓愈、之を倡し、柳宗元、李翱、皇甫湜等、之に和し、百家を排逐す。法度 森嚴、晋魏に抵牾し、上漢周を軋す。唐の文 完全として一王法と為る、此れ其の極みなり。.....

「三変」の最初は、高祖、太宗の世、「江左の余風」に沿った時期で、「王(勃)、楊(炯)」が活躍。次いで玄宗の、「雕琢」を厭い「雄渾」の氣に溢れた治世。この時

期は、「燕許（張説、蘇頌）」が文壇の主流を担った。これに続くのが右に引いた、韓愈、柳宗元らが主導して新しい文学を切り開いた時期となる。以下、「侍従酬奉」には、李嶠、宗之問、沈佺期、王維、「制冊」には、常袞、楊炎、陸贄、權德輿、王仲舒、李德裕、「言詩」は、杜甫、李白、元稹、白居易、劉禹錫、「謫怪」は、李賀、杜牧、李商隱と、それぞれのジャンルを代表する名を列挙する。

この二つの文学史の背景の違いには幾つかある。これについて川合氏<sup>(5)</sup>は、「三変説」は韓愈らの古文運動への高い評価、ならびにその復興の主張を背景とした、もっぱら文が中心に据えられた分類であり、一方「四変説」は、盛唐詩への絶対的評価の上に提起された、詩を中心としたものと説明される。これに取って論者の卑見をつけ加えるならば、「三変説」は、文を中心としながらも、詩をもその中に包括した、詩と文をむしろ分け隔てない文学史、「四変説」はこれとは逆に、言外に詩の独立性を主張する文学史であると思う。

右を踏まえるならば、それぞれの文学史は、何故、かたや詩と文を併せて対象とし、一方は詩のみを対象とするのか、という問題が浮かび上がってくる。これは何も、前者が文学一般を対象とする「文芸芸」で、後者が「詩話」だからという単純な問題ではない。著述としての出自、性格

は無論異にしながらも、両者は文学のあり方の変遷を歴史的に捉えようとする、文学史としての性格を共有しているからである。そこには両者の文学観の拠って立つところの違い、発言者と文学との関わり、或いはまた文学全般の中における詩の位置など、大きな問題をうちに含んでいると言えよう。今、右の視点から『滄浪詩話』の性格をもう一度捉え直し、本稿のとりあえずの結びに代えたいと思う。

ここで両者の相違点を整理しておく。まずは成立した時代の違い。前者は北宋中期、後者は南宋後期。著者の違いで見れば、官僚文人と処士。著述の性格は、正史と詩話。このうち前者の、北宋期、官僚文人の手になった正史という性格は、右の川合氏の指摘される、古文運動への評価とその復興という、「三変説」の背景と見事に重なる。では後者、『滄浪詩話』の方はどうであらうか。

南宋後期という時代について見るならば、先にも少し触れたように、この時期に至って、多くの作者による様々の営為の結果、唐の文学との対比を可能にするだけの、宋代文学としての個性の明確化と作品の蓄積が見られた。すなわち唐宋比較の条件が整った時期と考えられる。これに先の問題、何故詩なのか、を重ねるならば、詩における唐宋の対照が最も際だつ、或いは他のジャンルにも増して詩の



唐宋比較に意義があると筆者が判断した、という解釈が一応はできよう。

また筆者嚴羽が一生官途につかず処士、すなわち民間人として過ごしたということ、詩話という著作としての性格は、有機的な関連を有している。

宋代の詩の概説書が等しく教えるところではあるが、南宋になると、詩の享受者層が広がり、それは必ずしも士人のみに止まらなくなる。いったい宋代以降は士庶の区別があいまいな時期であるが、詩の書き手、読み手ともに、多くの民間人が詩と関わりを持つようになる。

北宋期の詩話は、歐陽脩、司馬光、或いは陳師道など、一流の詩人文人によるものが多く、それに対して南宋以降は、そうした詩話を集めて編集し直したもの、或いは筆者自身は一流の作者とは必ずしも言えないもの、が目につくようになる。たとえば、北宋期の詩話や、蘇軾、黃庭堅といった代表的詩人の、詩に関する發言を集め、言及される詩人、対象別に編み直した胡仔『苕溪漁隱叢話』、また多くの詩話の条項を内容別に編集し、全体として詩作百科としての体裁をとる魏慶之『詩人玉屑』。こうした著作の背景には、南宋期に入ってから後の詩の享受者層の拡大と、そうした人々を対象とした宮利出版の進展確立があると考えられる。先に見た「江湖派」の流行は、無論これに重なるも

のであるが、「江湖派」の中心人物のひとり、陳起が出版業を営み、「江湖詩人」たちの作品を編集して出版したこともよく知られている（『四庫提要』集部總集類二「江湖小集」「江湖後集」）。この他この時期に編集されたものに、唐詩の總集として知られる周弼『三體詩』があり、この書もまた、右のような民間詩人を対象とした詩作指南としての性格を有している。時代はやや下がり元初、先に触れた方回『瀛奎律髓』も、これらの人々を意識して著されたものと言えよう。

右に挙げた諸書には幾つかの特徴がある。まず目につくのは、例外が無いと言ってよいほど、近体を重視、或いは近体のみを対象とすることである。これは何故であろうか。近体詩が成立したのは、言うまでもなく唐代であるが、とくに中唐以降の文人の生涯における詩作のあり方を辿るならば、おおむね若年の未だ官途につかない時、或いは官位の低い際に、多く古体が製作され、そこに作者の政治的抱負が歌い上げられる。その一方、官途においてある程度の地位に着いてのちは、あまり古体に腕を振るわなくなり、多く近体を作る、という傾向が見られる。その最も典型的な例として、直ぐさま想起されるのが白居易であろう。周知のように、白の早年の作品をまとめた『長慶集』には、「諷諭」「閑適」「感傷」の三分類からなる古詩の力作が収

められるが、『後集』以降、この三分類は放棄され、詩作の大部分を近体が占めるようになる。無論これは一つの傾向に過ぎず、例外もあるのだが、先に見た張戒の用語を借りて大きく捉えるならば、「言志」により相応しい詩形は、あくまでも古体であると言える。

このことと、南宋期、新たに詩作に携わるようになった多くの民間詩人たちが、専ら近体をその対象としたこととは、関連がないだろうか。政治を志す者としてではなく、詩作そのものを楽しもうとするならば、志を盛る器としての古体に対する関心は低く、コンパクトな詩形の中に凝縮された詩的感興を盛り込む近体の方が好まれることは容易に想像できる。それに近体は韻律上の規則が有る反面、それに則りさえすれば、詩としての体裁をとることができるのだから。

伝統的な儒学思想に基づく文学観からは比較的自由であることも、こうした著作の特徴の一つと言える。むしろ詩作の技術面や、或いは純粹に「文学的」側面からの詩の考察が目にとまる。そしてこのこともまた、右に述べたことと関わりを持つ。

これらのことは「何故詩なのか」という問題にも関わってくる。彼ら民間詩人たちにとっての詩と文は、『唐書』『文芸伝』の書き手らにとっての詩と文と、当然のことながら

大きく異なる。これもまた川合氏<sup>9)</sup>が別の稿で指摘されるところだが、中唐から北宋にかけては、詩と文をともによくする文人が輩出した時期であった。これは事実としてそうであったと同時に、士大夫層の理念としても、詩と文の両方、ともによくすることが求められた時代であった。唐文三變説はこうした詩文併重、あるいは詩文兼能の時代思潮を背景に、士大夫の正統なる文学観のもと、前代の文学を振り返ったものと言えるだろう。

一方、江湖の多くの詩人にとって、文と詩の隔たりは、古詩と近体の隔たりにも増して大きなものであったはずだ。「詩話はあるが文話は少ない」とはよく言われるが、このことは南宋期以降の文学の担い手の多層化が生み出した、文学ジャンルのそれぞれの性格の分化と関係しているように思う。「瀟奎律髓」序に言う、「文の精なる者は詩と為す、詩の精なる者は律と為す」。このことばは彼らの文学ジャンルにおける好尚を、端的に物語るものと言えよう。嚴羽の著作は、右に見た、南宋期における詩をめぐる状況の中で生み出されてきた著作の特徴を典型的に備えている。詩のみを対象とし、とりわけ近体を重視すること、儒家の効用主義的な文学観からは距離を置き、何よりも詩的感興「興趣」を優先すること、詩作入門的性格およびそれに付随する啓蒙的口吻、等々。彼自身はたとえば江湖派に

対する批判を口にするが、その彼もまた、右に見てきたような詩をめぐる状況の流れの中にあることは否めない。彼の強いことばの江湖派批判は、かえって彼のことばの発信対象が江湖派の担い手と層を同じくすることを示している。また『詩人玉屑』が全書の総論、詩の原理論として冒頭に置くのも、他でもなくこの『滄浪詩話』なのである。

右に述べきったことには、いささか武断に過ぎる点があったかも知れない。とくに詩と文の関係、文学一般において詩を特別に扱うことは、士大夫層にあっても、そうなのであり、特に民間詩人に限られるものではない。ただし、詩と文を対比した際、このうち文に対する意欲関心が著しく欠落するのが、民間詩人、或いは南宋以降の詩の新しい享受者層の特質であることは間違いない。

嚴羽のもっぱら詩のみを対象とする文学史が、こうした階層に根ざして生まれてきたというのが、本稿の仮説であるが、だとすれば嚴羽以降の文学史観、とくに唐詩観を見る際、そこに提起される見解は、嚴羽の見解のどの部分を受け継ぎ、またどの部分が受け継がれなかったのかを、発言者の社会的或いは文学的立場を踏まえながら検証しなければならぬ。詩と文の関係も含めて考究すべき課題は多く残されている。

## 注

『滄浪詩話』に関して、本稿が特に参考にしたのは、郭紹虞『滄浪詩話校釈』（一九六一年北京、一九八三年北京、人民文学出版社再版）、ならびに荒井健『文学論集・滄浪詩話』（一九六七年、朝日新聞社、中国文明選十三）の両書である。論中、いちいち注記しなかったが、両書からは多大な恩恵をうけている。

なお引用文献のうち『滄浪詩話』は右の郭氏の書により、その他、詩話類は、おおむね『歴代詩話』（一九八一年、北京、中華書局）、『歴代詩話続編』（一九八三年、北京、中華書局）、および『苕溪漁隱叢話』（一九八一年、北京、人民文学出版社）によった。

- (1) 一九四八年、上海。一九八四年、北京、中華書局補訂本。同書一「詩分唐宋」
- (2) 荒井氏前掲書解説
- (3) 小川環樹『唐詩概説』（一九五八年、岩波書店、中国詩人選集別巻）五十六頁以下参照
- (4) 小川氏前掲書、二十八頁以下参照
- (5) 川合康三『詩文・唐代文学』（『中国文学を学ぶ人のために』一九九一年、世界思想社）の二、時期区分
- (6) 荒井氏前掲書解題

- (7) 吉川幸次郎『宋詩概説』（一九六二年、岩波書店、中国詩人選集二集）、小川環樹『宋詩選』（一九六七年、筑摩書房、とくにその解説）、並びに本稿次注参照
- (8) 村上哲見『三体詩』（一九六六年、朝日新聞社、新訂中国古典選十六、十七）には、この書ならびに南宋期の詩壇の状況に関する包括的な解説が見られる。
- (9) 川合康三『中国における詩と文―中唐を中心に』（一九九三年、日本文化研究所研究報告一九）